

【いのうえ やすし】

# 井上 靖

1906（明治40）年～

1991（平成3）年

幼少期を静岡県の湯ヶ島で、また青年期を浜松や沼津で過ごした芥川賞作家。

豊橋や浜松を中心とした地域を懐かしく思い描いた作品がある。

受賞した  
各賞

芥川賞

毎日芸術大賞

野間文芸賞

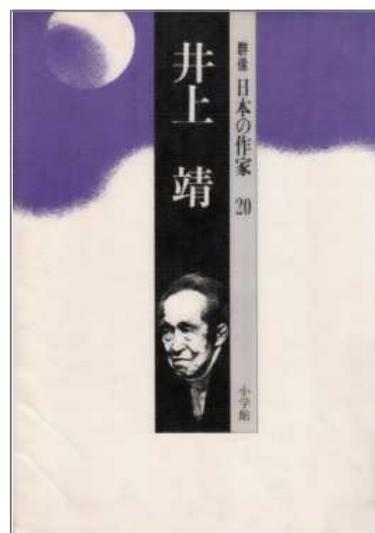
読売文学賞

読売文学賞

日本文学大賞

川端康成文学賞

文化勲章



『群像日本の作家 20 井上靖』  
高橋英夫他／著 小学館／発行

## 『しろばんば』

『幼き日のこと』（随筆）の中にも記述あり

井上靖は、父親が軍医であったためあちこちを転々としている。生まれは北海道の旭川だが、翌年母の郷里で本籍のあった静岡県の湯ヶ島へ戻り、幼少時代をそこで過ごした。

靖にとって故郷湯ヶ島が特別なつかしいところであったことは、『しろばんば』という自伝的作品からもわかることである。これは、主人公伊上洪作が小学校に入学するところから、6年生の1月に浜松に転居する直前までを描いている。この中には、洪作が豊橋を訪れる場面があるが、実際に靖も満6歳と満8歳のときに祖母かのと来豊している。当時、父は第十五師団軍医部一等軍医として豊橋に母と妹と共に赴任していた。しかし、靖は伊豆湯ヶ島の祖母（実は曾祖父の愛人で、血はつながっていない）にあずけられていた。

作品の中で豊橋はガス燈が灯り、人力車が走る大都会として描写されている。また老舗菓子店の黄色いゼリーを母といっしょに食べたときの思い出が描かれている。この作品では、叔母の死と祖母の死とが、それぞれ前編と後編のクライマックスに配置され、洪作少年の成長の過程が跡付けられている。児童でも読める代表作品の一つである。



『しろばんば』  
井上靖／著  
中央公論社／発行

## 浜松時代

『帽子』『過ぎ去りし日々』

浜松時代のことを、靖は『帽子』に次のように書いている。「私は郷里の小学校を卒業しなかった。六年生の三学期の初めに祖母が亡くなったので、否応なしに父の任地浜松に赴いて、その小学校にはいらなければならなかった。私は小学校の最終学年の学期を両親の許から市内の小学校に通ったのである。その頃、といっても、大正十年頃であるが、中学校の入学試験は何人かに一人の割合で、その難しさは今日と余り変らなかった。浜松の小学校では、中学校の入学試験に備えて毎日のように補習授業があり、生徒たちの学力はそれまで田舎でのんびりやって来た私などとは大きい隔たりがあった。三月に中学（現浜松北高校）の入学試験を受けたが、



『孤猿』  
井上靖／著  
中央論社／発行

私は落第した。」

作品の中に出てくる靖の入学した小学校は、浜松尋常高等小学校（現浜松市立元城小学校）である。中学校の受験に失敗した靖は、その後「私は今考えてみて、自分の一生で本当に真剣になった時期があったとすれば、この浜松での1年間ではなかったかと思う」（『帽子』より）、という記述もあるほど勉学に打ち込んだようである。

「家は町中にあったが、私は毎日30分ほどの時間をかけて、鹿谷公園という丘の公園を突っ切って通学した。雨が降った時だけ、途中から郊外電車に乗った」（『過ぎ去りし日々』より）と回想している。

また、「晴れた日は、現在の浜松市立文芸館のあたりの細

い小道を足早に駆け抜けて行き、雨天には、浜松鉄道（株）の通称奥山線（軽便鉄道）に乗った。」と『井上靖 生誕百年』の中に記されているが、当時靖が浜松の町の中で生活していた様子が眼に浮かぶようである。

## 『カマイタチ』『孤猿』

この2つの作品にも浜松時代の様子が描かれている。詩『カマイタチ』では「学校へゆく途中に犀ヶ崖という小さな古戦場があった。昼でも樹木鬱蒼とした深い谷で、橋の上からのぞくと、谷底にはいつも僅かな溜り水が落葉をひたしていた。」と、浜松の犀ヶ崖<sup>さいががけ</sup>という土地が舞台となっている。また『孤猿』には、浜松中学時代の強い思い出として残っている体操教師が「石村東平」として登場している。「孤猿」というのは、この体操教師の俳号

併し、私が二年に進級した時、上から落第して私たちの級へ入ってきた生徒が、最初の体操の時間に石村東平が一応整列している生徒たちの前に現れるや、  
「先生は俳句の号は何ですか」と訊いた。石村東平はまさに号令をかけようとしていた矢先、思いがけない質問で虚を突かれた形だ。私たちはどうなるかと固唾を飲んでしんとしていた。（中略）  
「わしの俳号を知りたいのか？ わしは孤猿と号している。孤独の孤に猿、ひとりぼっちの猿のことを言う。猿にも愚劣極まる集団生活が厭になって、仲間から離れて独りで静かにしていたと思う変わったのがあり。そういうのがつまり孤猿だ」

『孤猿』の中の一節

であり、この教師は浜松中学の名物教師（花井先生）であった。

1936（昭和11）年、「サンデー毎日」の懸賞小説で入選し、それが縁で毎日新聞社大阪本社に入社、1945（昭和20）年8月15日の終戦の日には新聞記者として“玉音ラヂオに拝して”というトップ記事を書いた。

文壇へのデビューは40代と遅かったが、1950（昭和25）年に『闘牛』で第22回芥川賞を受賞、自伝的なものをはじめ現代もの、歴史ものなど数多くの作品を世に出し、数々の賞を受賞した。

## 代表作

著書名	刊行年
詩 北国（カマイタチ）	1958（昭和33）年
星蘭干	1990（平成2）年
自伝的小説	
あすなる物語	1953（昭和28）年
しろばんば	1960（昭和35）年
わが母の記	1975（昭和50）年
小説 獵銃	1949（昭和24）年
闘牛	同上
黯い潮 氷壁	1950（昭和25）年
歴史小説	
天平の薨	1957（昭和32）年
敦煌	1959（昭和34）年